

## 「ふるさと」

北原 巖男

ふるさと伊那市を離れ東京暮らしが続く僕の愛読書の一つは、毎月届く「市報いな」。ふるさと伊那市が、伊那市の皆さんが、宅配便で自宅にやって来てくれるそのものなのです。

30 ページほどの広報誌一枚一枚に、「こんなことも行われているんだ。凄いなあ」「へえー、面白そうだなあ」「これは大変だ。みんな頑張ってください」等々、いつもさまざまな発見や出会いに興奮。ふるさと伊那市そしてふるさとの皆さんへ、勝手な思いや激励をあれこれ馳せています。

こうした、ふるさとそしてふるさとの皆さんとの一体感に浸れるささやかな幸せなひと時は、おそらく僕だけのものでないと思います。伊那市を遠く離れて「市報いな」を手にかけている皆さんも、きっと同じような気持ちを抱きながらご覧になっているのではないのでしょうか。

本年令和4年は、運気が最強とも言われる36年に一度の「五黄の寅年」。

ふるさと伊那市民の皆さん一人ひとりに、そして誰一人取り残すことなく光を届けるため市民の皆さんの先頭に立って市政運営に全力を尽くしている白鳥 孝市長はじめ伊那市役所の皆さんに、また、そんな伊那市に政策提言できる議会を目指している飯島 進議長をはじめ伊那市議会の皆さんに、心から力いっぱいのエールをお送りいたします！

今年こそ BEAT COVID-19！

そして前へ！

僕には「市報いな」と共に楽しみにしていることがあります。それは、「『市報いな』をお届けします」と記された一枚紙の中に、毎回さりげなく書かれている担当の方の短いエッセー。正にもう一つの「伊那市ふるさとだより」を実感します。

こんな記述もありました。「市役所の庁舎からは天竜川や三峰川が増水する様子が見え、増水している時は安全な水位だと分かっているけども「怖い」

と感じることがあります。もしかしたら、この「怖い」という感覚が防災に繋がるのかも知れません」

日課とされている真冬の早朝ウォーキング時の空についても。「早朝 5 時少し前。今朝は満天の星空でした。伊那に生まれ育った私でも、思わず空を見上げたくなるほどの迫力ある美しさ。街灯の少ない暗闇に移動してしばらく星空を堪能していると、おおぐま座のしっぽ辺りに流れ星が流れました。一瞬のことなので、見間違えか錯覚かも知れないと思っているとさらに追加でもう一つ。今日はきっと良いことがあると、気分良く出勤できたことが、どうやら今日一番良いことだったようです」

YES、僕のふるさととは伊那市！

(日本東ティモール協会会長)

